

## 国内の畜産物の需給動向

### 牛 肉

#### 7年9月の牛肉生産量、前年同月比1.1%増

##### 生産量

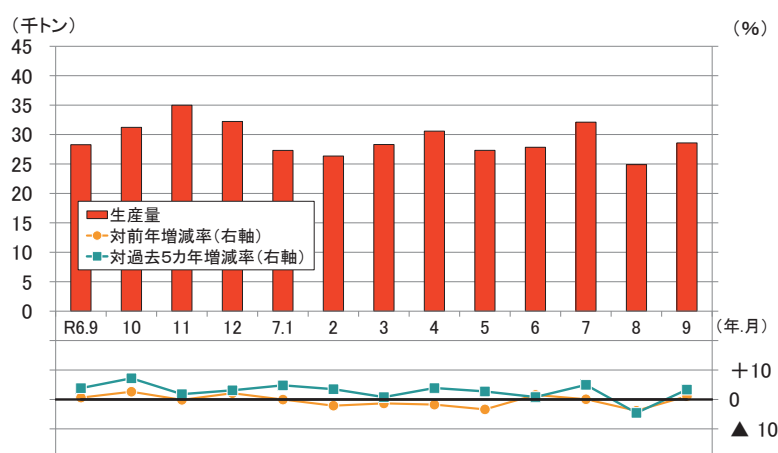
令和7年9月の牛肉生産量<sup>(注1)</sup>は、2万8589トン（前年同月比1.1%増）と前年同月をわずかに上回った（図1）。品種別では、和牛は1万4972トン（同4.7%増）、交雑種は7670トン（同5.2%増）と、ともに前年

同月をやや上回った一方、乳用種は5892トン（同11.2%減）と前年同月をかなり大きく下回った。

なお、過去5カ年の9月の平均生産量との比較では、3.4%増とやや上回る結果となった。

（注1）生産量の合計は、その他の牛、子牛を含む。

図1 牛肉生産量の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」  
注：部分肉ベース。

##### 輸入量

9月の輸入量について、冷蔵品は、国内需要が低調な中、現地価格の高止まりや入船遅れの影響などにより、主要輸入先を含むほとんどの輸入先からの輸入量が減少したことなどから、1万3060トン（前年同月比15.1%減）と前年同月をかなり大きく下回った（図2）。冷凍品では、米国産ショートプレート

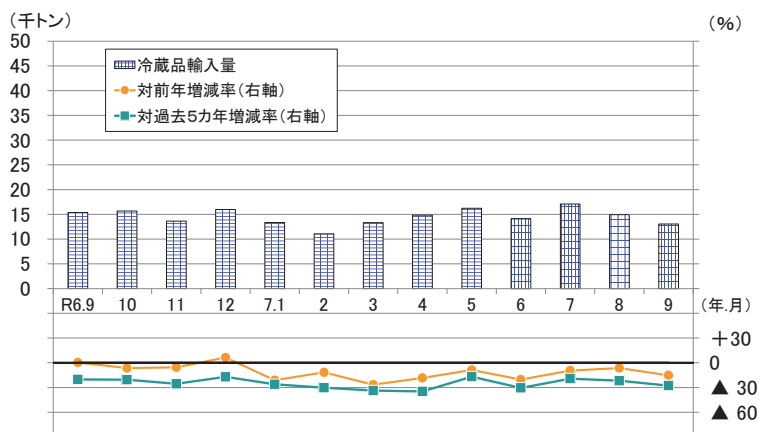
（バラ）や豪州産のうち主に加工用のひき材などに使用されるトリミングの輸入量が増加したことなどから、2万5258トン（同11.0%増）と前年同月をかなり大きく上回った（図3）。この結果、輸入量の合計<sup>(注2)</sup>では、3万8340トン（同0.4%増）と前年同月をわずかに上回った。

なお、過去5カ年の9月の平均輸入量との比較では、冷蔵品は27.7%減と大幅に、

冷凍品は3.9%減とやや、いずれも下回る結果となった。

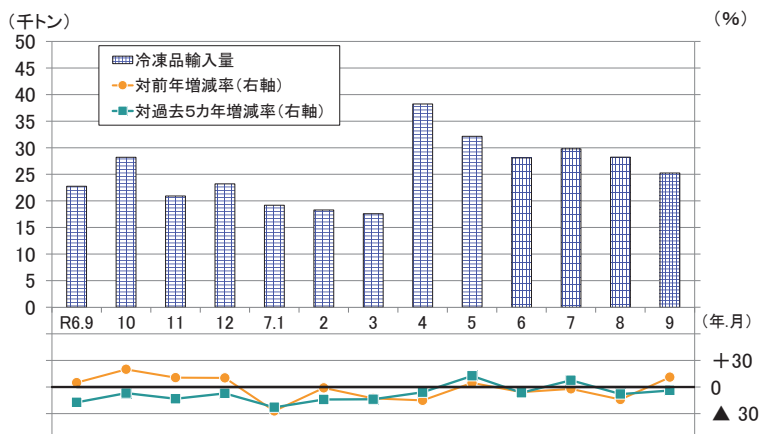
(注2) 輸入量の合計は、煮沸肉、ほほ肉、頭肉を含む。

図2 冷蔵牛肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」  
注：部分肉ベース。

図3 冷凍牛肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」  
注：部分肉ベース。

## 家計消費量等

9月の牛肉の家計消費量（全国1人当たり）<sup>(注3)</sup>は146グラム（前年同月比12.8%減）と前年同月をかなり大きく下回った（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の9月の平均消費量との比較でも、15.5%減とかなり大きく下回る結果となった。

9月の外食産業全体の売上高は、今年は特に厳しい残暑と物価高騰が続き、外食控えと

節約志向が強まり、レストラン業態・飲酒業態でさらにその傾向が強く、前半を中心に客足が鈍った。一方、ファストフード業態やファミリーレストランの低価格業態が堅調で、前年同月比4.8%増と前年同月をやや上回った（一般社団法人日本フードサービス協会「外食産業市場動向調査」）。

このうち、食肉の取り扱いが多いとされる業態として、ハンバーガー店を含むファストフードの洋風は、定番の季節限定メニューや新商品などが好調で、同6.6%増と前年同月

をかなりの程度上回った。また、牛丼店を含むファストフードの和風は、一部で主力商品の値下げなどもあり客数が回復し、期間限定メニューも好調で、同10.1%増と前年同月をかなりの程度上回った。一方、ファミリーレストランの焼き肉は、夏休み明けで若年層や家族客の集客が一服し、同7.3%減と前年同月をかなりの程度下回った。

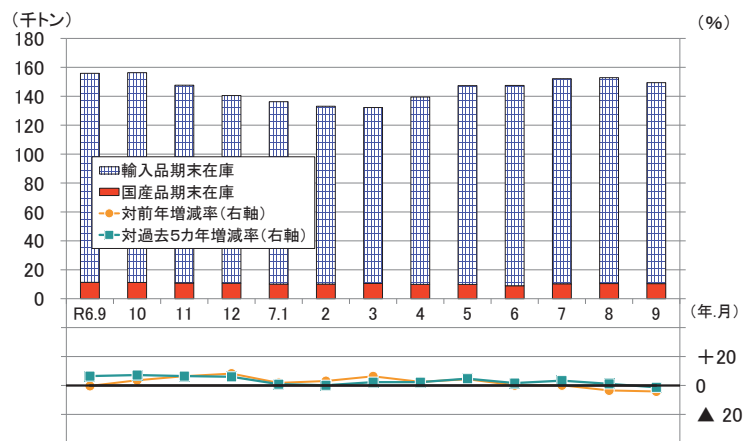
(注3) 1世帯当たりの数値を当該月の世帯人数で除して算出。

## 推定期末在庫・推定出回り量

9月の推定期末在庫は、14万9418トン（前年同月比4.1%減）と前年同月をやや下回った（図4）。このうち、国産品は1万431トン（同7.7%減）とかなりの程度、在庫の大半を占める輸入品は13万8987トン（同3.8%減）とやや、いずれも前年同月を下回った。

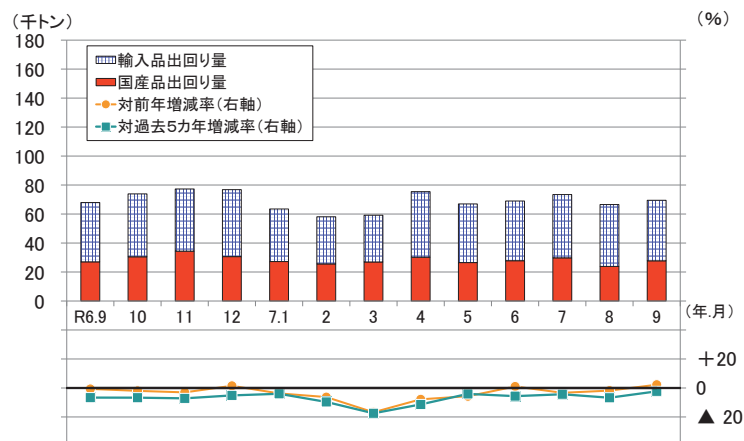
推定出回り量は、6万9484トン（同2.3%増）と前年同月をわずかに上回った（図5）。このうち、国産品は2万7744トン（同2.7%増）、輸入品は4万1740トン（同2.0%増）と、ともに前年同月をわずかに上回った。

図4 牛肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図5 牛肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部 丸吉 裕子)

# 豚 肉

## 7 年 9 月の豚肉生産量、前年同月比3.3%増

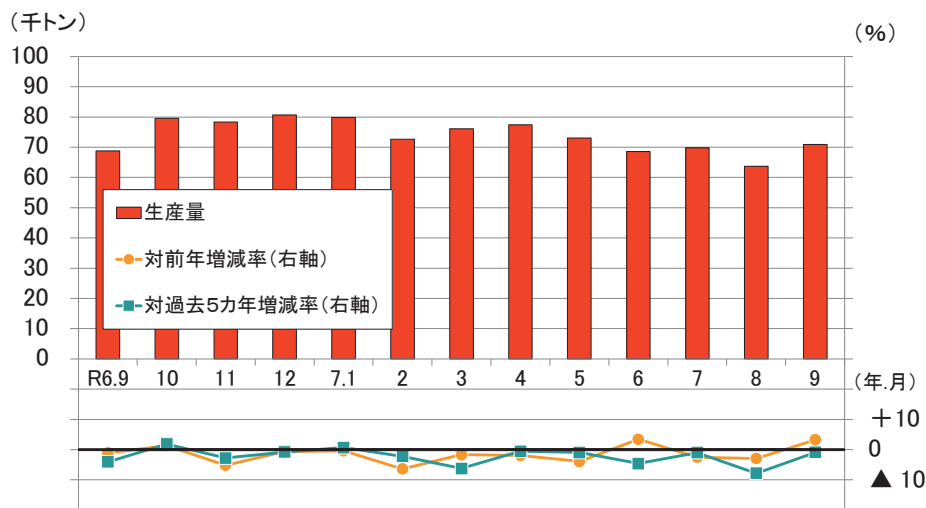
### 生産量

令和 7 年 9 月の豚肉生産量は、7 万 991 トン（前年同月比3.3%増）と前年同月を

やや上回った（図 1）。

なお、過去 5 カ年の 9 月の平均生産量との比較では、0.9%減とわずかに下回る結果となった。

図 1 豚肉生産量の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」  
注：部分肉ベース。

### 輸入量

9 月の輸入量について、冷蔵品は、米国産の価格が高水準にある中、カナダ産が増加したことなどから、3 万 4042 トン（前年同月比12.4%増）と前年同月をかなり大きく上回った（図 2）。冷凍品は、国内の輸入品在庫が多いことなどから、4 万 2155 トン（同 12.9%減）と前年同月をかなり大きく下回った（図 3）。この結果、輸入量の合計<sup>(注1)</sup>では、

7 万 6220 トン（同3.1%減）と前年同月をやや下回った。

なお、過去 5 カ年の 9 月の平均輸入量との比較では、冷蔵品は10.3%増、冷凍品は6.4%増と、ともにかなりの程度上回る結果となった。

（注 1）輸入量の合計は、くず肉を含む。

図2 冷蔵豚肉輸入量の推移

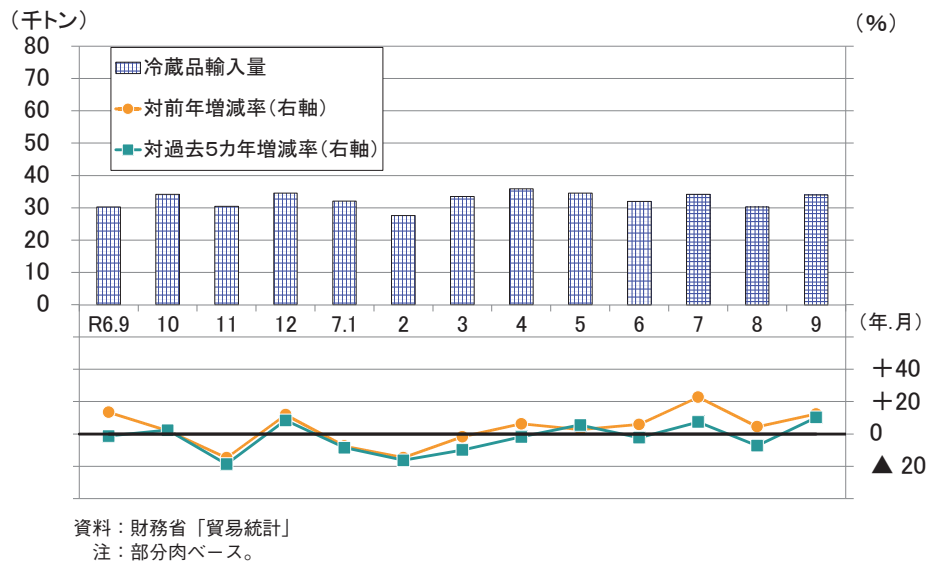
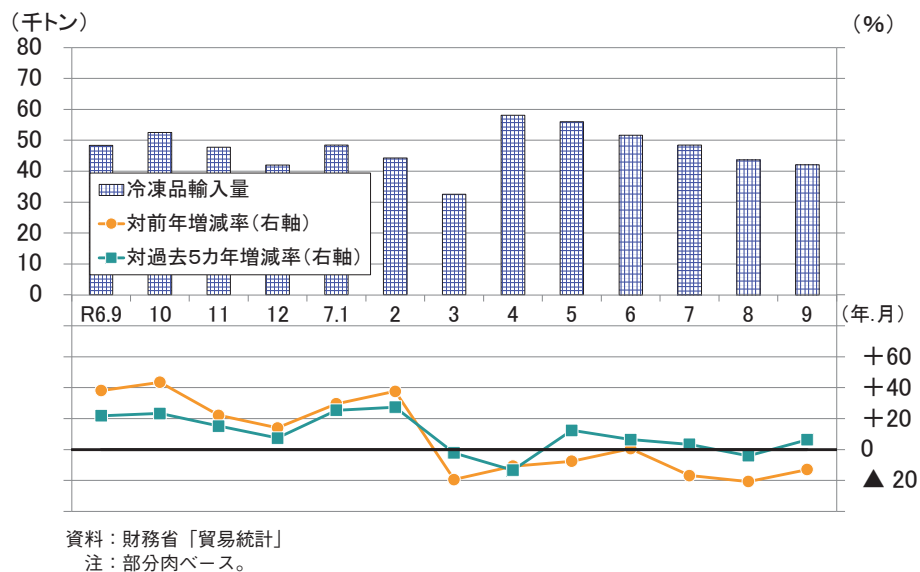


図3 冷凍豚肉輸入量の推移



## 家計消費量

9月の豚肉の家計消費量（全国1人当たり）<sup>（注2）</sup>は、630グラム（前年同月比4.2%増）と前年同月をやや上回った（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の9月の平均消費量との比較でも、1.7%増とわずかに上回る結果となった。

（注2）1世帯当たりの数値を当該月の世帯人数で除して算出。

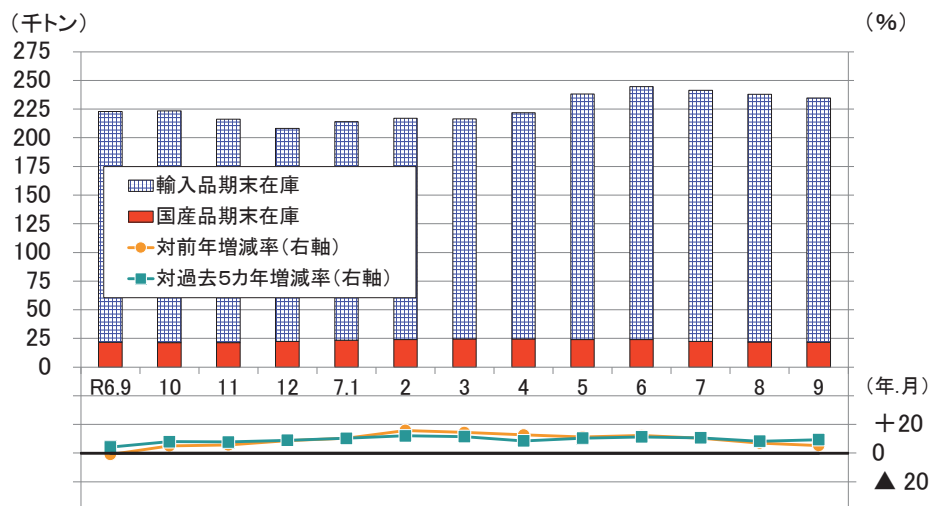
## 推定期末在庫・推定出回り量

9月の推定期末在庫は、23万4720トン（前年同月比5.4%増）と前年同月をやや上回った（図4）。このうち、輸入品は、21万3175トン（同6.0%増）と前年同月をかなりの程度上回った。

推定出回り量は、15万356トン（同2.3%増）と前年同月をわずかに上回った（図5）。このうち、国産品は7万1134トン（同2.8%増）、

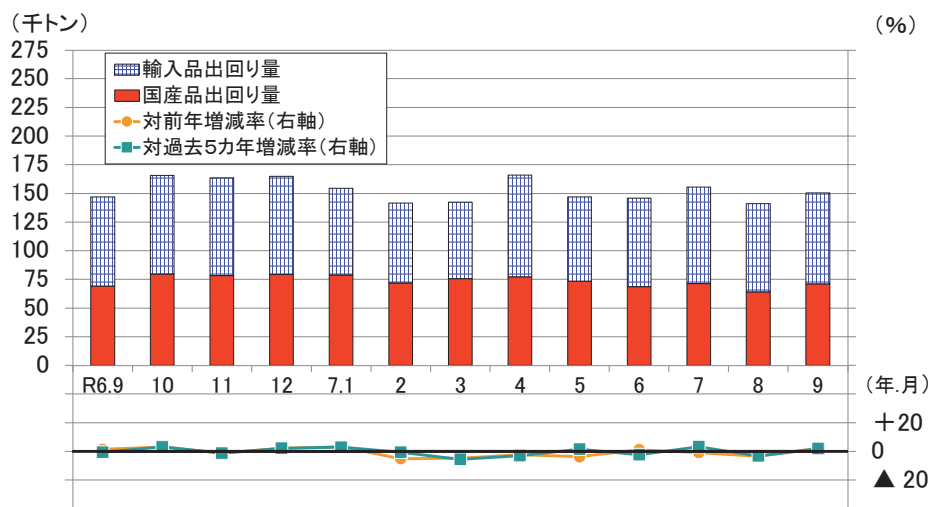
輸入品は7万9223トン（同1.9%増）と、  
ともに前年同月をわずかに上回った。

図4 豚肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図5 豚肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部 小森 香穂)

# 鶏 肉

## 7年9月の鶏肉生産量、前年同月比4.9%増

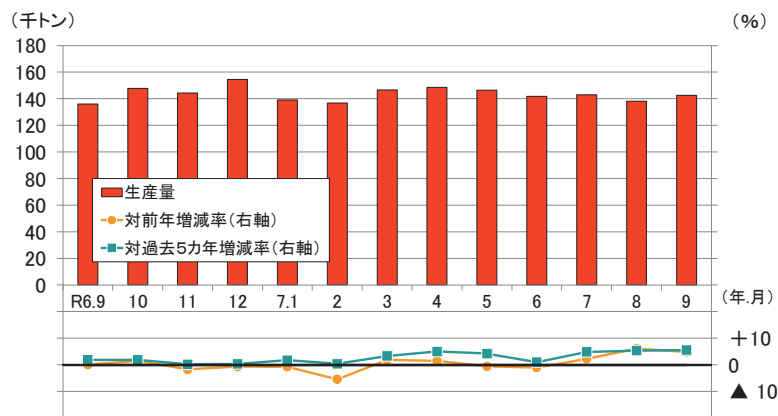
### 生産量

令和7年9月の鶏肉生産量は、14万2551トン（前年同月比4.9%増）と前年同月を

やや上回った（図1）。

なお、過去5カ年の9月の平均生産量との比較でも、5.6%増とやや上回る結果となった。

図1 鶏肉生産量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ  
注1：骨付き肉ベース。  
注2：成鶏肉を含む。

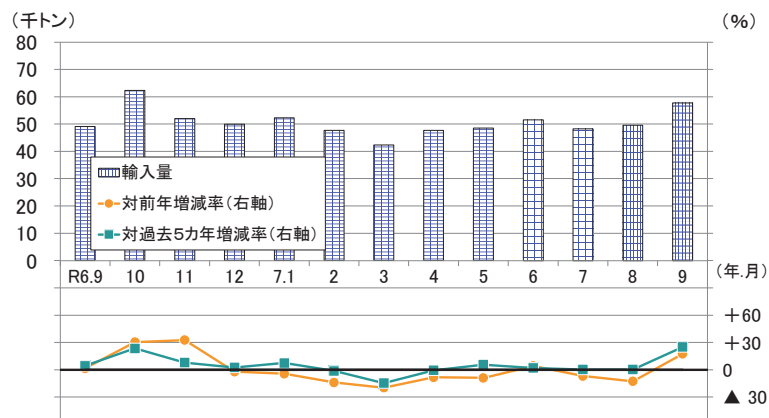
### 輸入量

9月の輸入量は、主要輸入先の一つであるブラジルで発生した高病原性鳥インフルエンザにより、出船できなかったものが通関された

ことなどから、5万7773トン（前年同月比17.6%増）と前年同月を大幅に上回った（図2）。

なお、過去5カ年の9月の平均輸入量との比較でも、25.1%増と大幅に上回る結果となった。

図2 鶏肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」  
注：鶏肉以外の家きん肉を含まない。

## 家計消費量

9月の鶏肉の家計消費量（全国1人当たり）<sup>（注）</sup>は、502グラム（前年同月比5.2%減）と前年同月をやや下回った（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の9月の平均消費量との比較でも、1.1%減とわずかに下回る結果となった。

（注）1世帯当たりの数値を当該月の世帯人数で除して算出。

## 推定期末在庫・推定出回り量

9月の推定期末在庫は、16万4129トン（前年同月比3.3%減）と前年同月をやや下回った（図3）。このうち、輸入品は13万250トン（同4.6%減）と前年同月をやや下回った。

推定出回り量は、19万6055トン（同4.1%増）と前年同月をやや上回った（図4）。このうち、国産品は14万1825トン（同2.9%増）とわずかに、輸入品は5万4230トン（同7.3%増）とかなりの程度、いずれも前年同月を上回った。

図3 鶏肉期末在庫の推移

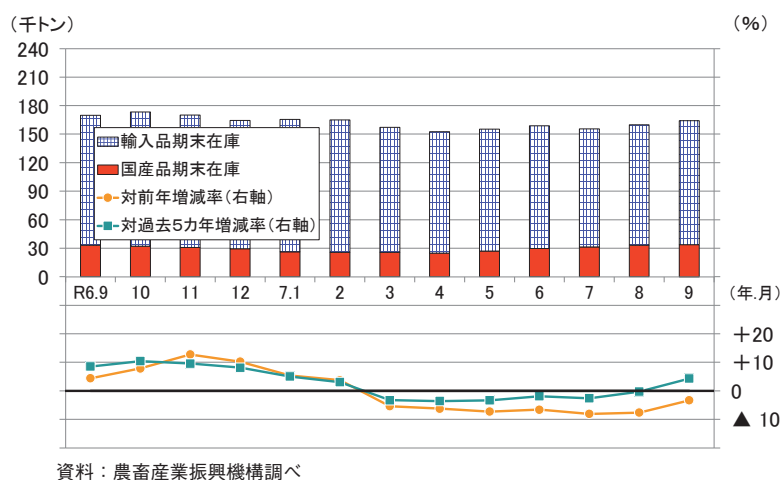
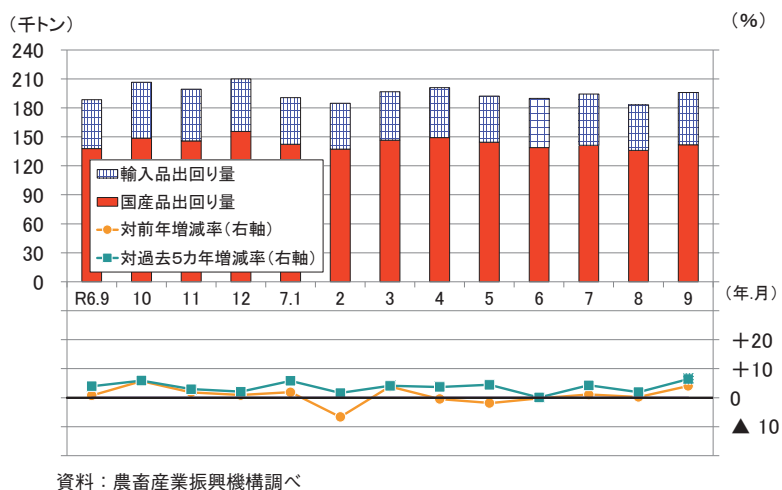


図4 鶏肉出回り量の推移



（畜産振興部 越川 紗弥）



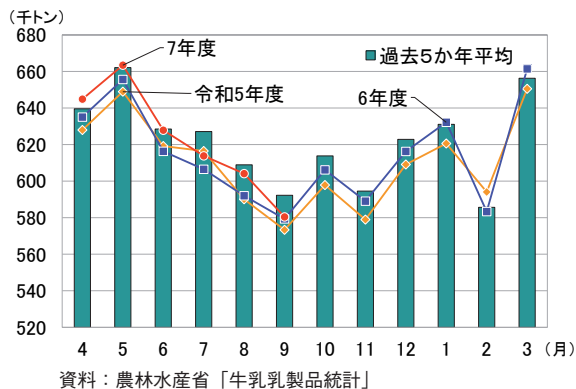
# 牛乳・乳製品

## 7年9月の全国の生乳生産量、前年同月並み

### 北海道の生乳生産量、前年同月比0.6%増

令和7年9月の生乳生産量は、58万397トン（前年同月比0.2%増）と前年同月並みとなった（図1）。地域別では、北海道が34万6360トン（同0.6%増）となり、14カ月連続で前年同月を上回った。一方、都府県では23万4037トン（同0.5%減）と、前月は14カ月ぶりに前年超えとなったものの、再び前年同月を下回った。

図1 生乳生産量の推移



9月の生乳処理量を用途別に見ると、牛乳等向けは33万1076トン（同0.1%減）と、前年同月並みとなった。このうち、業務用向けについては2万4417トン（同3.5%減）と4カ月連続で前年同月を下回った。

乳製品向けは24万5867トン（同0.6%増）と7カ月連続で前年同月を上回った。これを品目別に見ると、クリーム向けは5万7675トン（同1.7%減）と2カ月ぶりに前年同月

を下回り、チーズ向けは3万875トン（同2.8%増）と4カ月ぶりに前年同月を上回った。脱脂粉乳・バター等向けは、11万2347トン（同1.5%増）となり、14カ月連続で前年同月を上回っている（農畜産業振興機構調べ「交付対象事業者別の販売生乳数量等」）。

### 全国の牛乳生産量、前年同月比0.3%減

9月の牛乳等生産量を見ると、飲用牛乳等のうち牛乳は、26万9028キロリットル（前年同月比0.3%減）となった。成分調整牛乳は前年割れが継続しており、1万7032キロリットル（同6.5%減）となった。また、加工乳については、1万1688キロリットル（同1.3%減）と2カ月連続で前年同月を下回った。

はっ酵乳は8万5979キロリットル（同0.1%増）と前年同月並みとなった。

### 9月のバター在庫量、前年同月比20.4%増

9月のバターの生産量は4478トン（前年同月比7.5%増）と、前年同月をかなりの程度上回り、7カ月連続で上回った（図2）。一方、出回り量は6345トン（同0.4%減）と4カ月連続で前年同月を下回った（農畜産業振興機構調べ）。在庫量については、9月末は3万1336トン（同20.4%増）となり、13カ月連続で前年同月を上回ったが、前月と比べると季節的な動向により減少した（図3）。

図2 バターの生産量の推移

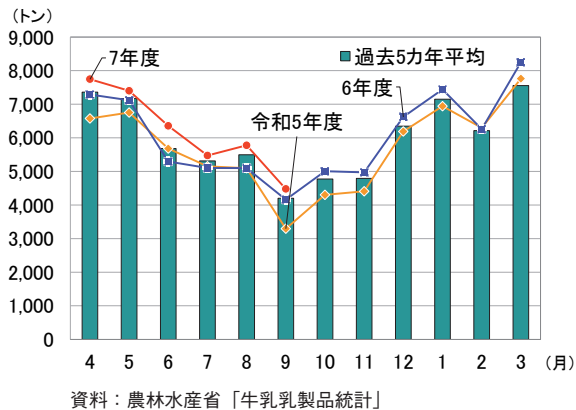


図4 脱脂粉乳の生産量の推移

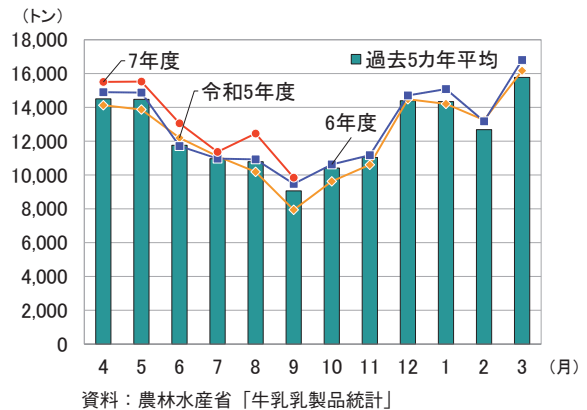


図3 バターの在庫量の推移

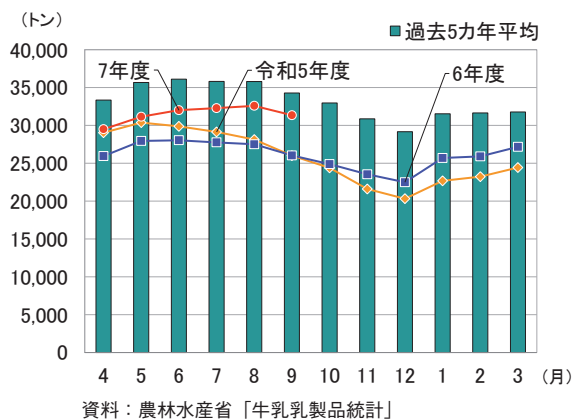
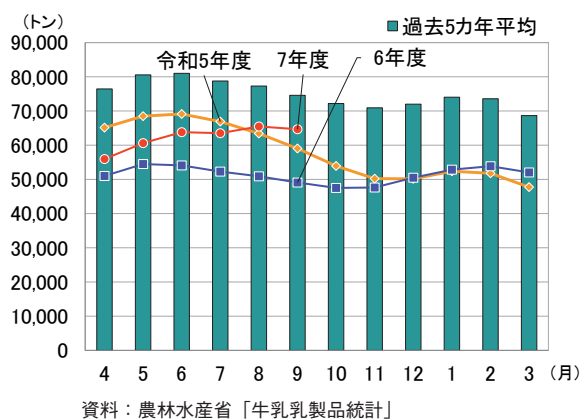


図5 脱脂粉乳の在庫量の推移



## 9月の脱脂粉乳在庫量、前年同月比31.7%増

9月の脱脂粉乳の生産量は、9845トン（前年同月比3.9%増）と前年同月をやや上回り、7カ月連続で上回った（図4）。一方、出回りは1万664トン（同6.2%減）とかなりの程度下回り、8カ月連続で下回った（農畜産業振興機構調べ）。9月末の在庫量は、6万4662トン（同31.7%増）と前年同月を大幅に上回り、10カ月連続で上回った。（図5）。

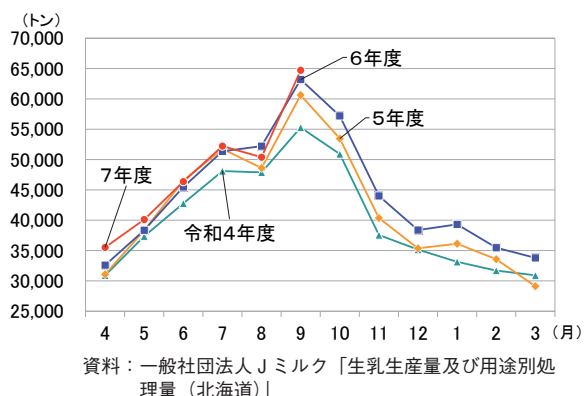
## 北海道の生乳移出量、前年同月比2.4%増

9月は例年、学校給食が再開するなど需要が増加する一方で、夏場の暑さなどにより都府県の生乳生産量が落ち込むことから、生乳の道外移出量が最も多くなる。令和7年9月の生乳の道外移出量は、6万4723トン（前年同月比2.4%増）と2カ月ぶりに前年同月を上回った（図6）。

なお、道内の同月の牛乳等向け処理量は、4万7395トン（同1.6%減）と4カ月ぶりに前年同月を下回った。一方で、乳製品向け処理量は、23万2399トン（同0.7%増）と7カ月連続で前年同月を上回っている。

図6 北海道生乳移出量の推移

(酪農乳業部 田中 麻紀)



## 鶏 卵

### 7年10月の鶏卵卸売価格、前年同月比18.5%高

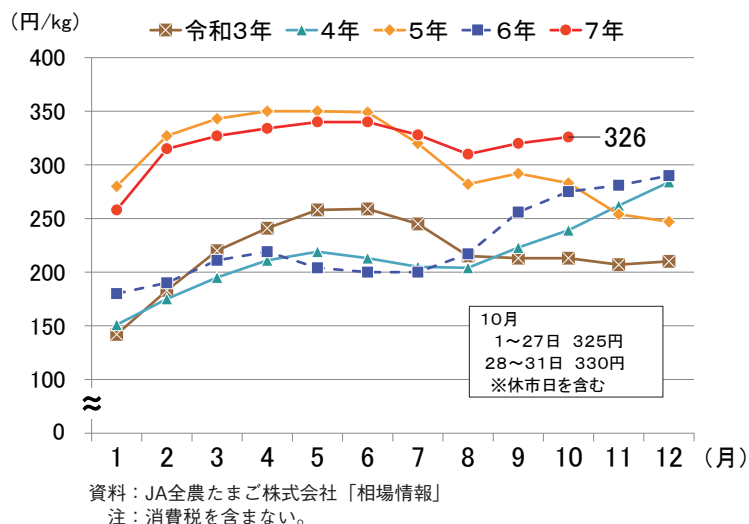
#### 卸売価格

令和7年10月の鶏卵卸売価格（東京、Mサイズ基準値）は、1キログラム当たり326円（前年同月差51円高、前年同月比18.5%高）と、前年同月の同価格を大幅に上回った（図）。同価格の日ごとの推移を見ると、月初の同325円から28日には同330円に上昇し、月間の上昇幅は同5円となった。なお、過去

5カ年の10月の平均卸売価格は235円であり、それと比較しても、38.7%高と大幅に上回る結果となった。

供給面を見ると、気温の低下による卵重の回復が見られるものの、今夏の酷暑の影響により、生産量は低水準となった。需要面を見ると、荷動きは堅調に推移しているものの、外食筋では月見にちなんだ季節プロモーションが終盤にさしかかり、落ち着きが見られた。

図 鶏卵卸売価格（東京、Mサイズ基準値）の推移



## 家計消費量

9月の鶏卵の家計消費量（全国1人当たり）<sup>(注)</sup>は、841グラム（前年同月比5.0%減）と前年同月をやや下回った（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の9月の平均消費量との比較では、やや下回る結果となった。

（注）1世帯当たりの数値を当該月の世帯人数で除して算出。

（畜産振興部 越川 紗弥）

# 令和6年度食料需給表・食料自給率について

## 令和6年度の食料自給率、前年度並みの38%

農林水産省は令和7年10月10日、「令和6年度食料需給表（概算）」<sup>(注1)</sup>および「令和6年度食料自給率について」を公表した。

食料自給率とは、日本国内に供給されたすべての食料（以下「国内仕向量」という）に対する国内で生産された食料の割合を示す指標であり、供給熱量（カロリー）ベースおよび生産額ベースで計算する総合食料自給率と、重量ベースの品目別自給率の2種類がある。

総合食料自給率のうち、基礎的な栄養価であるエネルギー（カロリー）に着目した供給熱量ベースの総合食料自給率を見ると、6年度は、主食用米の消費量が増加したこと、国産てん菜・さとうきびの生産量の増加により産糖量が増加したことがプラス要因となった一方で、小麦の単収減少により生産量が減少、大豆、野菜、魚介類の生産量も減少したことがマイナス要因となり、38%と前年度並みとなった（表）。また、供給熱量ベースの食料国産率<sup>(注2)</sup>も、47%と前年度並みとなった。

経済的価値に着目して、国民に供給される食料の生産額に占める国内生産の割合を示す

指標としては、生産額ベースの総合食料自給率がある。これを見ると、特に、米、野菜、畜産物の国内価格上昇に伴い、国内生産額が増加したことなどにより、64%と前年度から3ポイント上昇した。また、生産額ベースの食料国産率についても、69%と前年度から2ポイント上昇した。

一方の品目別自給率は、各品目における自給率を重量ベースで算出したものである。分子を国内生産量、分母を国内消費仕向量<sup>(注3)</sup>として計算したものであり、各要素の増減が同自給率の増減に反映される構成となっている。

このうち、肉類（鯨肉を除く。以下同じ）は、前年度並みの53%となった。また、肉類全体の国民1人・1年当たり供給純食料<sup>(注4)</sup>は、34.3キログラムと前年度から0.4キログラム増加した。

なお、畜種によって異なるものの、畜産全体で見ると、家畜に給与する飼料のうち、20%は主に国産品が占める粗飼料、80%は主に輸入品が占める濃厚飼料となっている（可消化養分総量<sup>(注5)</sup>（TDN）換算ベース）。飼料自給率（TDN換算ベース）については、26%と前年度から1ポイント減少した。このうち、粗飼料自給率は80%、濃厚飼料

自給率は13%と、いずれも前年度並みとなった。また、飼料自給率を考慮した肉類の品目別自給率については、飼料用穀物の多くを海外から輸入していることから低い水準にあり、前年度並みの8%となった。

(注1)「食料需給表」とは、1年間に国内で供給される食料の生産から最終消費に至るまでの総量を明らかにするとともに、国民1人当たりの供給純食料および栄養量を示したものであり、食料自給率の算出の基礎となるものである。計測期間は、牛肉、豚肉、牛乳・乳製品、鶏卵については、当年4月1日から翌年3月31日まで、鶏肉については、平成21年度以降、暦年（当年1月1日から12月31日まで）となっている。

(注2)飼料が国産か輸入かにかかわらず、畜産業の活動を反映し、国内生産の状況の評価する指標である。総合食料自給率が飼料自給率（畜産物に仕向けられる飼料が、国内でどの程度賄われているかを示す指標）を反映しているのに対し、食料国産率では飼料自給率を反映せずに算出している。

(注3) 1年間で国内市場に出回った食料の量を表す数。国内消費仕向量＝国内生産量＋輸入量－輸出量±在庫増減量によって算出される。

(注4) 各品目の1年間に国内で消費に回された食料のうち、食用向けの量を表す「粗食料」を人間の消費に直接利用可能な形態に換算した量を日本の総人口（各年度10月1日現在）で除したものの。なお、令和6年10月1日現在の人口は、1億2380万2000人（前年度比0.4%減）。

(注5)エネルギー含量を示す単位であり、飼料の実量とは異なる。

表 食料自給率の推移

(単位：%)

項目		昭和 60年度	平成 7年度	17年度	27年度	28年度	29年度	30年度	令和 元年度	2年度	3年度	4年度	5年度	6年度 (概算値)
品目別 自給率 (重量 ベース)	肉類 (鯨肉を除く)	81 (13)	57 (8)	54 (8)	54 (9)	53 (8)	52 (8)	51 (7)	52 (7)	53 (7)	53 (8)	53 (8)	53 (8)	53 (8)
	牛肉	72 (28)	39 (11)	43 (12)	40 (12)	38 (11)	36 (10)	36 (10)	35 (9)	36 (9)	38 (10)	39 (11)	40 (12)	42 (12)
	豚肉	86 (9)	62 (7)	50 (6)	51 (7)	50 (7)	49 (6)	48 (6)	49 (6)	50 (6)	49 (6)	49 (6)	49 (6)	48 (6)
	鶏肉	92 (10)	69 (7)	67 (8)	66 (9)	65 (9)	64 (8)	64 (8)	64 (8)	66 (8)	65 (9)	64 (8)	65 (8)	64 (8)
	鶏卵	98 (10)	96 (10)	94 (11)	96 (13)	97 (13)	96 (12)	96 (12)	96 (12)	97 (11)	97 (13)	97 (13)	96 (13)	97 (12)
	牛乳・乳製品	85 (43)	72 (32)	68 (29)	62 (27)	62 (27)	60 (26)	59 (25)	59 (25)	61 (26)	63 (27)	62 (27)	63 (29)	63 (29)
	魚介類	93	57	51	55	53	52	55	53	55	58	54	53	52
	米	107	104	95	98	97	96	97	97	97	98	99	99	97
	小麦	14	7	14	15	12	14	12	16	15	17	15	17	16
	大豆	5	2	5	7	7	7	6	6	6	7	6	7	7
供給熱量ベースの 総合食料自給率		53	43	40	39	38	38	37	38	37	38	38	38	38
生産額ベースの 総合食料自給率		82	74	70	66	68	66	66	66	67	63	58	61	64
飼料自給率		27	26	25	28	27	26	25	25	25	26	26	27	26
供給熱量ベースの 食料国産率		61	52	48	48	46	47	46	46	46	47	47	47	47
生産額ベースの 食料国産率		85	76	73	70	71	70	69	70	71	69	65	67	69

資料：農林水産省「食料需給表」

注1：品目別自給率＝国内生産量/国内消費仕向量×100（重量ベース）である。

注2：肉類（鯨肉を除く）、牛肉、豚肉、鶏肉、鶏卵、牛乳・乳製品の（ ）については、飼料自給率を考慮した値である。

以下、食肉（牛肉、豚肉、鶏肉）、牛乳・乳製品、鶏卵の品目別自給率（重量ベース）、

国民1人・1年当たりの供給純食料について紹介する。

# 1 牛肉

## 令和6年度の牛肉自給率、前年度から2ポイント上昇の42%

令和6年度の牛肉自給率は、42%と前年度を2ポイント上回り、5年連続の上昇となった（図1）。

国内生産量（枝肉換算）については、平成29年度以降、畜産クラスター事業などの取り組みにより和牛を中心におおむね増加傾向となっている。令和6年度は、乳用種および交雑種が減少した一方、和牛が増加し、全体では50万5000トン（前年度比0.6%増）と前年度をわずかに上回った。

輸入量については、近年、増加傾向で推移していたが、2年度以降は新型コロナウイルス感染症（COVID－19）の影響による外食需要の低迷や為替の円安傾向などから減少傾向にあった。6年度においては、現地相場高などにより米国からの輸入量が減少したものの、豪州のうち主に加工用のひき材などに使用されるトリミングの輸入量が増加した

ことなどにより、72万4000トン（同1.0%増）と前年度をわずかに上回り、5年ぶりの上昇となった。

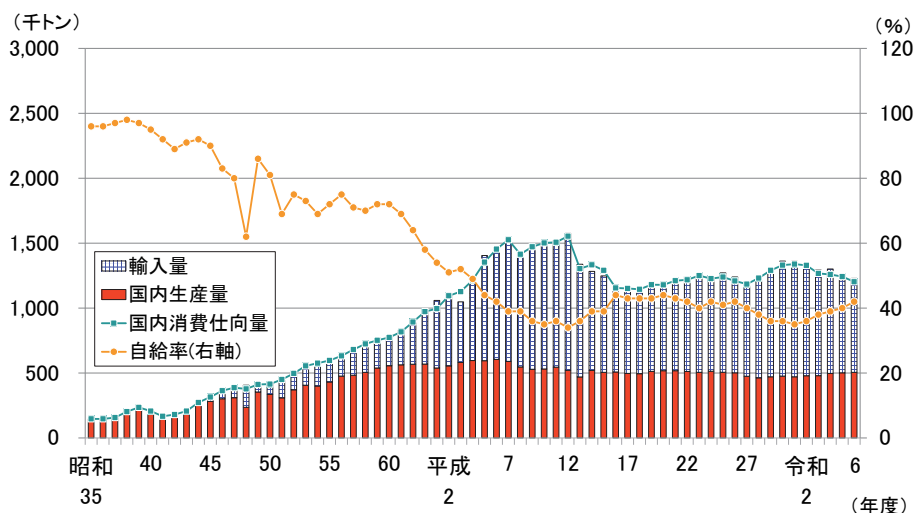
その他、輸出量については、特に米国向けが大幅に増加し、1万5000トン（同25.0%増）と前年度を大幅に上回り、国内在庫については、1万1000トンが積み増しとなった。

この結果、国内消費仕向量については、120万3000トン（同3.2%減）と前年度をやや下回り、5年連続の減少となった。

このため、国民1人・1年当たり供給純食料（精肉換算）については、5.9キログラム（同3.0%減）と前年度から0.2キログラム減少した。

なお、飼料自給率を考慮した自給率は、12%と前年度並みとなった。肉用牛に給与される飼料には、国産品で賄われる割合が高い粗飼料が含まれていることから、牛肉の同自給率は、主に濃厚飼料を給与される豚肉や鶏肉に比べて高い水準にある。

図1 生産量、輸入量、国内消費仕向量、自給率の推移（牛肉）



資料：農林水産省「食料需給表」

注：国内生産量および輸入量は枝肉換算ベース。



## 2 豚 肉

### 令和6年度の豚肉自給率、前年度から1ポイント低下の48%

令和6年度の豚肉自給率は、48%と前年度を1ポイント下回り、4年ぶりの低下となった（図2）。

国内生産量（枝肉換算）については、近年は疾病発生の影響などにより減少した時期はあったものの、畜産クラスター事業などの取り組みにより増加傾向で推移していた。しかし6年度は、出荷頭数の減少などから、127万8000トン（前年度比1.5%減）と前年度をわずかに下回った。

輸入量については、欧州やブラジルからの冷凍品の輸入量が増加したことなどにより、143万3000トン（同7.7%増）と前年度をかなりの程度上回った。

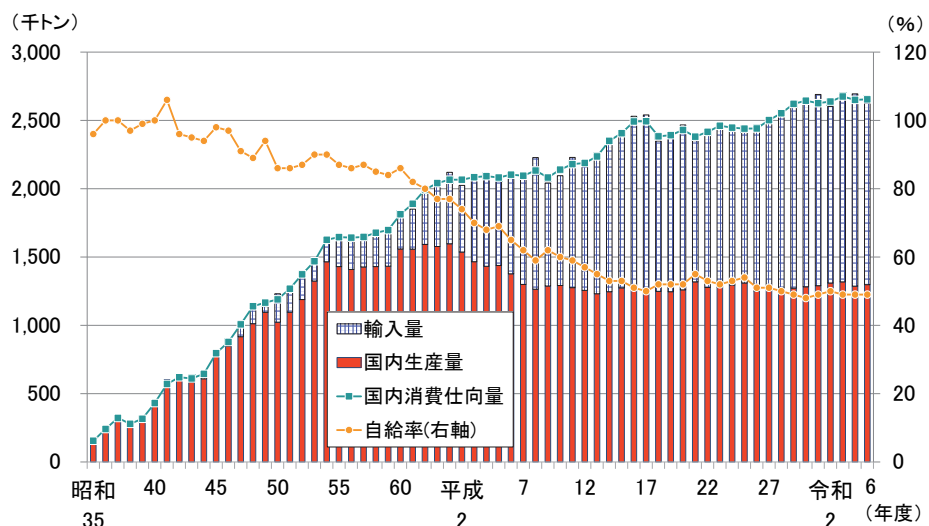
その他、輸出量については、堅調な需要があった香港およびシンガポールへの輸出が大幅に減少し、2000トン（同33.3%減）と前年度を大幅に下回り、国内在庫については、3万9000トンが積み増しとなった。

この結果、国内消費仕向量については、267万トン（同0.6%増）と前年度をわずかに上回った。

このため、国民1人・1年当たりの供給純食料（精肉換算）は、13.2キログラム（同0.9%増）と前年度から0.1キログラム増加した。

なお、豚は、輸入品の占める割合が高い濃厚飼料が主に給与されており、飼料自給率を考慮した自給率は、8年連続で6%となった。

図2 生産量、輸入量、国内消費仕向量、自給率の推移（豚肉）



資料：農林水産省「食料需給表」

注：国内生産量および輸入量は枝肉換算ベース。

### 3 鶏 肉

#### 令和6年の鶏肉自給率、前年から1ポイント低下の64%

令和6年の鶏肉自給率は、64%と前年から1ポイント低下した（図3）。

国内生産量（骨付肉換算）については、消費者の健康志向の高まりや根強い国産志向を背景に増加傾向で推移しており、6年も堅調な需要から、171万1000トン（前年度比1.2%増）と13年連続で過去最高を更新した。

輸入量については、国内の在庫水準によって多少の増減はあるものの、近年、増加傾向で推移しており、6年は、国内の節約志向を背景とした鶏肉需要などから、98万6000トン（同7.9%増）と前年をかなりの程度上回った。

その他、輸出品については、日本国内での

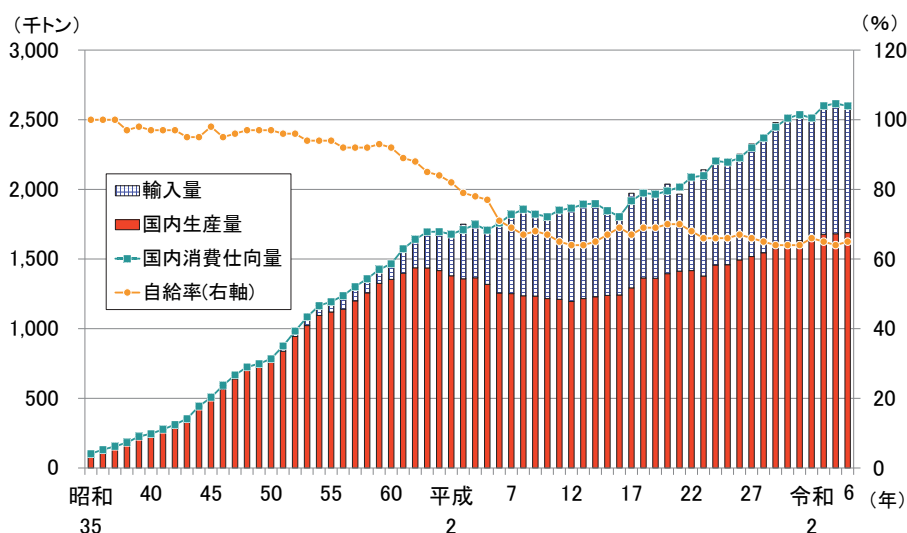
高病原性鳥インフルエンザ発生に伴う輸出先側の輸入停止の影響が見られたものの、香港やベトナムでの需要の拡大などから、5000トン（同25.0%増）と前年を大幅に上回った。国内在庫については、1万5000トンが積み増しとなった。

この結果、国内消費仕向量については、267万7000トン（同3.0%増）と前年をやや上回った。

このため、国民1人・1年当たりの供給純食料（正肉換算）は、14.9キログラム（同3.3%増）と前年から0.5キログラム増加した。

なお、鶏は、輸入品の占める割合が高い濃厚飼料が主に給与されており、飼料自給率を考慮した自給率は、8%と前年並みとなった。

図3 生産量、輸入量、国内消費仕向量、自給率の推移（鶏肉）



資料：農林水産省「食料需給表」

注1：国内生産量および輸入量は骨付き肉ベース。

注2：平成20年度以前は年度（4月～翌3月）、21年から暦年。



## 4 牛乳・乳製品

### 令和6年度の牛乳・乳製品自給率、前年と同水準の63%

令和6年度の牛乳・乳製品の自給率（以下断りのない限り生乳換算ベース）は、前年度と同じく63%となった（図4）。飼料自給率を考慮した自給率についても、前年度と同じく29%となった。

国内生産量（生乳生産量）は、737万3000トン（前年度比0.7%増）と3年ぶりの増加となった。用途別の内訳を見ると、飲用向けが382万1000トン（同0.5%減）と前年度を下回った一方、乳製品向けは350万7000トン（同2.0%増）と前年度を上回った。

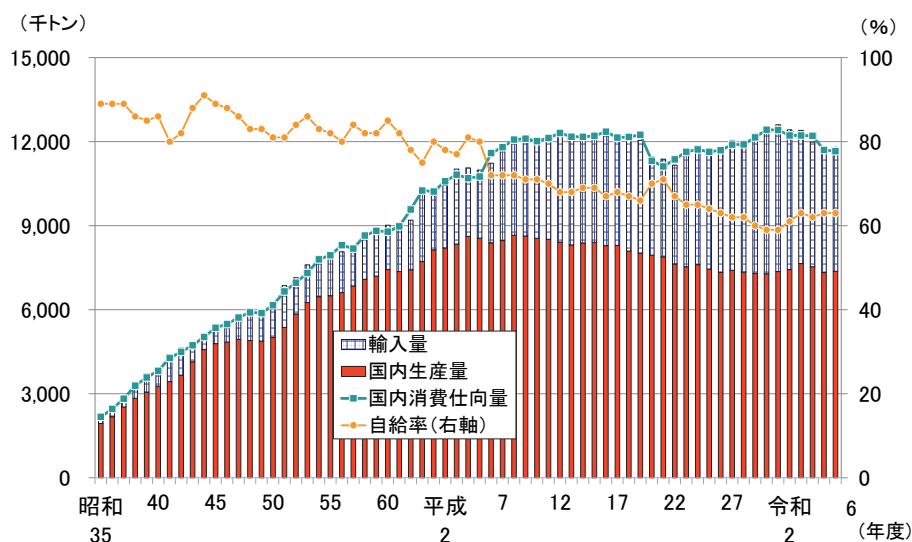
輸入量は、442万1000トン（同3.3%増）

と前年度からやや増加し、チーズや飼料用脱脂粉乳などの増加により5年ぶりの増加となった。輸出量は、脱脂粉乳の減少などにより6万3000トン（同7.4%減）とかなりの程度減少した。また、需要量を示す国内消費仕向量は、1165万7000トン（同0.4%減）と前年度をわずかに下回った。

チーズの国内消費仕向量は、4年度以降の商品の値上げや物価高騰による買い控えによる減少が一服したこと、輸入量が5年ぶりに増加したことなどから、30万4000トン（同3.1%増、製品重量ベース）と5年ぶりの増加となった。

牛乳・乳製品の国民1人・1年当たり供給純食料は、90.7キログラム（同0.6%増）と前年度からわずかに増加した。

図4 牛乳・乳製品生産量、輸入量、自給率の推移（生乳換算）



資料：農林水産省「食料需給表（令和6年度）」

注：国内生産量および輸入量は生乳換算。

## 5 鶏 卵

### 令和6年度の鶏卵自給率、前年度から1ポイント上昇の97%

令和6年度の鶏卵自給率は、97%と前年度から1ポイント上昇し、畜産物の中で最も高い水準を維持した（図5）。

国内生産量（殻付換算）については、2年度以降、COVID－19の影響による価格低下やHPAIの記録的な発生の影響などにより減少傾向で推移していたが、6年度は、244万4000トン（前年度比0.0%増）と前年度並みとなった。

輸入量については、加工原料用の粉卵が約9割を占めているが、ひっ迫していた国内の需給が年度前半に緩和したことなどから、9万8000トン（同11.7%減）と前年度をかなり大きく下回った。

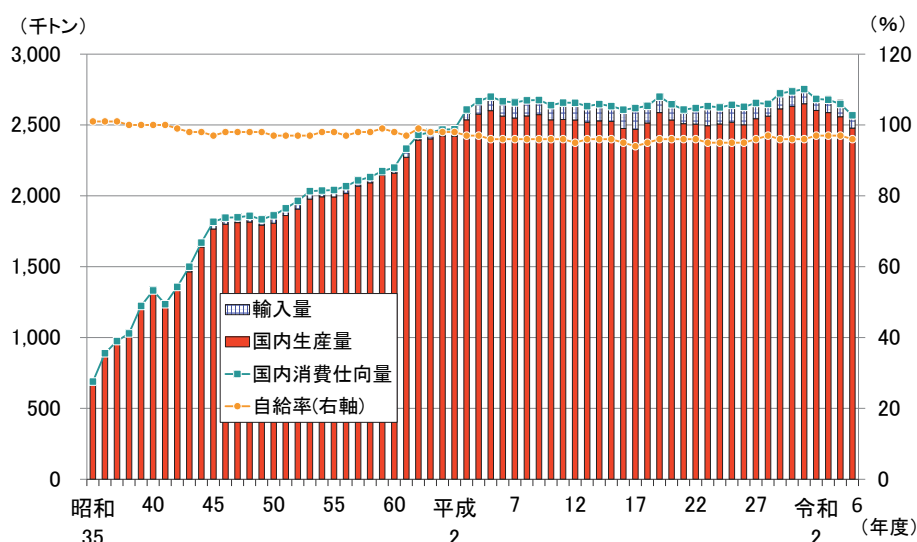
その他、輸出量については、約98%は香港向けであり、香港向けの輸出量が大幅に増加したことなどから、2万2000トン（同10.0%増）と前年度をかなりの程度上回り、国内在庫については、増減はなかった。

この結果、国内消費仕向量については、252万トン（同0.6%減）と前年度をわずかに下回った。

このため、国民1人・1年当たり供給純食料（付着卵白および殻を除く）は、16.2キログラム（同0.3%減）と前年度から0.1キログラム減少した。

なお、鶏は、輸入品の占める割合が高い濃厚飼料が主に給与されており、飼料自給率を考慮した自給率は、12%と前年度から1ポイント低下した。

図5 生産量、輸入量、国内消費仕向量、自給率の推移（鶏卵）



資料：農林水産省「食料需給表」

注：国内生産量および輸入量は殻付きベース。

（食肉、鶏卵：畜産振興部 山下 侑真）

（牛乳・乳製品：酪農乳業部 田中 麻紀）